

研究テーマ

「肢体不自由者の日常生活活動支援に関する研究」

研究室の紹介

当研究室では、脳卒中などで後天的に運動機能に障害を持った方の生活支援を目的とした動作や心理面の課題について検討します。

主な研究テーマ

肢体不自由者に関するリハビリテーション
肢体不自由者の障害受容

主な担当講義科目

理学療法臨床科学特論
理学療法臨床科学演習

研究紹介

・在宅脳血管障害者にテレビ電話を用いた遠隔リハビリテーションの果たす役割

脳血管障害者宅にテレビ電話を設置し、理学療法士または作業療法士から週1～2回定期的に日常生活やリハビリテーションに関する情報収集と指導を行った。視覚情報により情報収集や指導が容易で、途中で更衣困難となったが、1か月弱でもとのレベルまで回復した例もあった。画像の滑らかさや画面に映る範囲など制約もあるが、限られた資源の効率的運用・個別的サービスの向上・在宅障害者や家族の負担軽減が期待できる有用な手段と考えられる。

・遠隔地間を想定したテレビ会議システムによる初学者向け介助技術指導の検討

テレビ会議システムを在宅一施設間を想定して大学内の2地点に設置し、初学者を対象に映像を介した遠隔地間における基本動作の介助指導をする際の環境設定について検討した。ハード面では、死角等を最小限にするカメラの位置・動作の開始場所と移動方向・範囲等、ソフト面では介入時の指導手順の整理・平易な表現での説明・ポイントの強調や繰り返し・適切な課題の選択・リスク管理等に留意が必要である。

・改訂版初学者向け介助技術教材ビデオについて

初学者により効果的に介助技術を指導するために試作した教材用ビデオの撮影環境・条件を再考し、改訂版を作製した。改訂版は、注意点を強調し、失敗例を盛り込み、見やすくわかりやすくなった。但し、丁寧な説明が逆に理解しにくい点もあり、内容の吟味も必要と考えられた。教材ビデオでのイメージ化には限界もあり、遠隔地からの介助技術指導では、ポイントを押さえて簡潔にわかりやすく内容をまとめた教材ビデオと実際の介助による学習の繰り返しがスキルアップに有効と考えられる。

・「障害受容」という言葉はリハビリテーション専門職種においてどのように使われているか？

「障害受容」という言葉が、リハビリテーション・チームにおいてどのような意味で使われているかについて、症例報告を収集して文献研究を行った。その結果どの職種でも「自らの障害をありのままに受け入れること」という点では一致していた。ソーシャルワーカー以外は、症例の協力がうまく得られない場合、意欲的でないなど否定的にとらえる傾向があった。ソーシャルワーカーは障害受容を長期的な視点でとらえ、そのままの状態を受け入れて援助していた。

大学院進学を希望する方へ一言

私なんか大学院って、と構えずに、もう少し学びたい、知りたいことがあるんだけど…、とモヤモヤしている方はどうぞご連絡ください。一緒に考えましょう。